1　ヒロカズ・カナザワ

「お前は有名なカナザワ・ヒロカズの子どもか」――一九九〇年頃、アゼルバイジャン共和国に指導に赴いた折、講習生の一人が私に尋ねてきた。そこで

「それは私ですよ」。

私はおかしさをこらえて答えたが、彼は「カナザワは昔の偉大な空手家で、とっくに死んでいる」と主張し、なかなか合点しない。ようやくわかった時の彼の驚きと感激の顔……。

現在、私が設立した國際松濤館空手道連盟には百二カ国の加盟国があるが、この中で直接指導できたのはせいぜい八十カ国にとどまる。特に初めて訪れる国でこのような質問を受けることが多い。

「カナザワ」の名が伝説的に海外の空手愛好家に浸透したのは次のような理由からであろう。

一九五〇年代、旧ソ連では西側の国の文化は禁止され、空手も例外ではなかった。しかし、海外PR用ビデオや空手の教本は持ち込まれており、それが何度もダビングされ、手刷りのガリ版印刷による海賊版が出回っていた。KGBに見つかれば逮捕されるとわかっていながら隠れて練習する者が多かった。しかも当のKGBの幹部たちも密(ひそ)かに空手の練習をやっていたという時代があったのである。

ハワイやヨーロッパでは私が直接指導に当たり、その折の模範演武や試割（試し割り）がTV中継され大反響があった。

また、冒険家であり小説家のC・W・ニコル氏が『Moving Zen ―― To Kanazawa Hirokazu ――』を発刊したのも要因の一つだろう。

海外指導の後はサイン会になるのが常であるが、ある時期、どこへ行っても皆、『Moving Zen』を持って並んでいる。英語あり、仏語あり、スペイン語あり、「ニコルさんは何カ国語も出しているんだな」と感心していたが、ある時ニコル氏に聞いてみると出版したのは英語版のみという。なんと他はすべて海賊版だったのだ。

私の「組手」「型」の教本にしても然(しか)りである。イランなど中東の会員が「先生、喜んで下さい。新しい本ができました」とにこにこして差し出すのを手にとってみると、それは私の教本のイスラエル版だったりイラン版だったり……彼らには「著作権」という概念が全くない。

私の周りの者は言った。

「先生、もうこれ以上、本やビデオは出さない方がいいですよ。出しても盗用されるだけです。先生には何の利益にもならない。技は口伝で教えた方がいいと思います」

それも一理。「しかし」と、私は考える。「カナザワ」の名も出版物もビデオも、空手普及の一手段に過ぎない。空手道の技と心が正しく伝わり、それぞれの国に根づいてくれればそれで良いと思っているから——。

この私の海外指導の基本姿勢は、母校拓殖大学校歌の精神に基づいている。

拓殖大学は一九〇〇年、明治時代に内閣総理大臣を務められた桂太郎翁が海外における諸事業に当たる人材を養成する目的で創立した大学である。建学以来、その精神を理解し賛同する情熱あふれる若者が多数入学してきた。私の同窓生もモンゴル、マレーシアなどへそれぞれ雄飛していく中で、たまたま私の前には空手があった。

校歌の一節「人種の色と地の境、わが立つ前に差別なし」は世界文化の興隆に寄与し、諸民族発展のために貢献する博愛、平等と開拓の精神を表しているが、この校歌のどこにも「拓大」の名は出てこない。校歌に自分の学校の名をなぜ入れないのか不満に思った時もあったが、今の私の気持ちは「博愛、平等、感謝」、校歌に謳(うた)われている精神そのものである。

ここで、実際に海外で、空手がどのくらい評価されているかという実例を一つ紹介したい。

一九九六年（平成八年）五月、グルジア共和国を訪問した時のことである。飛行機が着陸して、さて降りようと立ち上がりかけた途端、機内にアナウンスが流れた。「皆様、静かにそのままお座り下さい」乗客は何事かと顔を見合わせながらも、言われるまま座り直した。窓から外を見ると黒塗りのリムジンが止まっていた。誰か偉い人が乗っているのだと直感して安堵した。再びアナウンスが流れた。

「乗客のなかに、ミスター・カナザワ、いらっしゃいましたらお知らせ下さい」

――何と私のことだ。私は前の座席に案内された。間を置かず、すぐ前の扉が開いて数人の軍人がなだれ込むように入って来た。私はそのまま彼らに周りをガードされ急ぎ足でタラップを降り、横づけされたリムジンに乗り込んだ。日の丸とグルジアの国旗を立てた車は、サイレンを鳴らして走る先導車に導かれて、交通信号無視で宿泊先のホテルに直行した。戒厳令下にあるグルジア共和国初の空手大会には国のスポーツ大臣や要人が多数見え、私への歓迎ぶりも含め、いかに空手が世界共通の身体文化として高く評価されているかを知る好例だった。

空手が世界へ普及すればするほど、戦争や地域紛争などの影響を受けることが多くなる。

その一例であるが、一九九四年第五回世界大会でイスラエルはパレスチナが出場するなら参加しないと主張してきた。案じた私はパレスチナの代表に直接電話をし、次回は優先するからと出

場を見合わせてもらい、一九九七年第六回大会には両国とも揃って参加した経緯がある。本当に戦争の悲惨さを知った者は、戦争が破壊するだけで、何一つ残さないことが身にしみてわかる。

日本の国内も問題が多い。先日、空手関係の事務所に顔を出した折、居合わせた政治家秘書のI氏が私に哀願するように言われた。

「日本の教育を救うのは先生の空手ですよ。もう、武道しか残っていません」

I氏の話はこうである。普段、車通勤のI氏が山手線に乗ったところ、中学生らしき若者が大股を開いて足を投げ出し、他の客が座れない。I氏は学生時代、後輩にしたように「きちんと座りなさい」と注意したが、彼は知らんぷり。そこでI氏は彼の膝を押して「足を閉じなさい」と強く言ったら、少年はしぶしぶ座り直したという。

帰宅してI氏が細君にこのことを話すと、「お願いだから、明日から車で通ってほしい。その注意する癖が元で、いつか事件に巻き込まれてしまう」と、彼女は青くなって言ったという。政治に青雲の志を持っていたI氏の、日本の将来と教育に対する切実な問題提起だった。

その私自身、つい先日、「クソじじい」と呼ばれる初の経験をした。

大田区の細い車道を、五、六人の女子中学生が横に広がって歩いていた。私はその後をそろそ

ろと車を進めていたが、気づかないので小さくクラクションを鳴らした。彼女らはチラリと見ただけ、再度合図すると、ちょっと身をよけた。私が通りすぎ際に「歩道があるのだから、ちゃんと歩道を歩きなさい」と注意すると、その中の一人が「うるさい、クソじじい」と叫んだのだ。

私は驚くと同時に、教育者としての責任感もあって車を降りた。そして、「今、クソじじいと言ったのは誰か」と大きな声を出した。女子中学生はびっくりして小さくなっている。そこで、私は静かに「交通事故は起こした方も遭った方も悲劇だから、お互いに注意しよう」と伝えた。彼女らは黙って下を向いているのでわかったのだと思い、私は車に戻って行き過ぎた。すると後ろから「早く行け、クソじじい」と黄色い声が追っかけてきた。

全く情けない。この子らを育てた親は、一体何をしているのか。大人たちの責任を思いながら、「武道しかない」と言ったI氏の言葉が脳裏によみがえった。求められているのは、我々が常々生徒に言っている「身を修めること」ではないか。

それと、現在の「死」や「酷さ」を隠してしまう教育も問題である。ある児童文学者が、国語の教科書の、酒呑童子の首が宙を舞う場面は酷いからダメ、地獄絵も教育上良くないからダメと、無難な場面の物語ばかりが選ばれると嘆いていた。

人間、「死」や「戦争」、「暴力」などの怖さ、酷さ、悲惨さを知ってこそ、「生」や「平和」、「護身」などの意味、ありがたさがわかるというものである。

「武道か、スポーツか」ということも、これがわかれば自ずと答えが出てくる。試合も同じで、「死」の意味がわかった者がピョンピョン飛び回るようなことをするだろうか。

まず、「死」を正しく認識することからすべてが始まる。

2　父の教え

門下生と雑談をしているところに電話が入った。私が直立不動で、電話の相手に返答している姿に、「相手は誰だろう。金澤先生にも怖い人がいるのだろうか」と、彼らはいぶかっている。

私が絶対に頭の上がらない人物――それは兄『金澤勘兵衛』――父の急死後二十六歳で家業を継いでから父代わりとして我々を育て、特に私が空手家になってから、全面的に支援してくれている人物である。

兄はもう八十歳を超したが、いまだに小本浜漁業協同組合長、三十八組合、二万人の会員のい